

「姑蘇繁華図」に見る清代前期の江南地域における紡織業及びその流通

— 地方文献に照らして —

彭 偉 文

PENG Weiwen

(COE研究員・RA)

はじめに

「姑蘇繁華図」は、清・乾隆24年（1759）に、蘇州を中心に描かれた作品である。題名のとおり、この絵には、主に繁華たる蘇州及びその西にある木洩、石湖が描かれている。特に蘇州は、この長い絵巻の約半分を占め、絵の流れから見ると最も重要な描写の対象となっている。それゆえ、もともと「盛世滋生図」と題されていたこの絵巻は、1950年代、遼寧博物館の所蔵品になったときに、「姑蘇繁華図」という題名に改められたのである。

蘇州出身の清宮画院供奉である徐揚^{じょやう}を作者としたこの絵巻には、当時の蘇州及び周辺地域に関する情報が多く含まれている。生活用品の形及び用い方や船漕ぎの動作など、図像から直接読み取れる情報はいうまでもないが、その歴史的、地理的背景をあわせて考えると、絵には直接見えない数多くの情報を見出すこともできると思われる。本稿では、「姑蘇繁華図」を資料に、明・清時代の地方文献に照らして清代前期の江南地域における紡織業及びその製品の流通について検討してみようと思う。

I 「姑蘇繁華図」の概略

すでに述べたように、「姑蘇繁華図」は清・乾隆24年（1759）、宮廷画家である徐揚が描いた作品である。長さ1,241センチ、高さ36.5センチ、紙本著色の絵巻で、清の廢帝溥儀によって北京の故宮から長春に持ち出され、満州国が滅ぶ際、民間に流出し、1945年から中国・遼寧博物館の所蔵となり、現在、国家一級文物と指定されている。

絵の内容は、作者徐揚が巻末に書いた跋によると、その図は、靈巖山^{れいがんざん}より、木洩を経て東へ行き、横山を通り、石湖を渡り、上方山を通り過ぎ、太湖の北岸にある獅、和両山の間を抜き姑蘇郡の城に入り、葑、盤、胥^{ほう ばん しょう}の三つの門を経由し、閶門^{しょうもん}から出、山塘橋を曲がり、虎丘にとまる⁽¹⁾。

とあり、木洩の西北にある靈巖山を始め、蘇州及びその付近で最も繁華な地域を選んで絵に入れたものである。

作者の徐揚は、代々閶門の近くに住み、「監生」であった。清・乾隆16年（1751）に皇帝の初めての南巡に際して自分の描いた冊子を献上し、才能を認められて北京に召され、宮廷画家となったと伝えられる。

満州族によって建てられた清朝が、漢民族の政権である明から天下を奪いとった際、戦争による江南地域の被害は激しかった。その後、乾隆朝に至って、ようやく元気を取り戻した。乾隆帝の治下の時代は、その祖父・康熙帝の時代と共に「康乾盛世」と称され、清代の最も国力が強く、社会が安定し豊かな時期であった。地方文献によれば、乾隆年間の蘇州は、「長い年月、太平の世であり、休養して民力を養い、人口が増え、物が豊富になり」、「五音繁会」、「五色陸離」のようなところである。徐揚は、その「姑蘇繁華図」を描いた目的について、乾隆帝の度々巡幸した蘇州を描き、「帝治光昌」、すなわち乾隆帝の支配による太平の世を讃えるのであると、跋で述べている。それゆえ、実際の世にごく普通なはずの不潔または不吉な場面が、この絵ではまったく描かれていない。こういう意味では、当時の蘇州の実態をそのまま反映したとは言えないだろう。だが、蘇州に生まれ育ち、清宮画院に入る以前、乾隆年間にできた『蘇州府志』に、古蘇州の最も詳しい地図「姑蘇城図」を残したこの画家の、高度なテク

ニックでできたこの作品は、18世紀のこの地方の繁栄ぶりをよく表しているのは確かだと思われる。

II 衣料品を扱う店舗の看板

「姑蘇繁華図」には、にぎやかな商店街や、立派な城壁・城門、きれいなアーチ型になっている橋、川を往来する船など、鑑賞者の目を惹く数々のものが描かれている。字まではっきり読める看板も非常に目立つ。飲食店や銭荘、食料品や文房具、ないし漢方薬や雑貨などを扱う店舗の多さが、当時の蘇州での商業がどれだけ繁盛していたかを物語っている。なかでも、衣料品を扱う店舗は特に多い。古来、江南地域は木綿の栽培と養蚕が盛んであり、紡織業が非常に発達していたことが、ここに反映されているのだろう。

江南地域の木綿栽培は宋末～元初、西北の陝西と東南方面の広東・福建から広がってきたといわれる。明代に至ると、長期に亘る戦争で貧困な生活に強いられ、農民の救済処置として、明太祖は次の命令を下した：

およそ農民の田地の五畝より十畝を持つ者は、桑、麻、木綿を各半畝栽培せよ。十畝以上を持つ者は、これに倍せよ。令のごとくしない者には、罰が有る。⁽³⁾ この命令によって木綿栽培は中国に普及したと、中国、特に江南地域の経済史を専門とする研究者に指摘されている。

この命令は全国範囲に公布されたが、実際に綿産業が発達していたのは江南地域である。その理由について、西嶋定生は、江南地域（西嶋は、「揚子江下流デルタ」という用語を用いている）は明代の中国における木綿栽培普及形態上の二つの類型の接点にあると、分析した。すなわち、木綿栽培の発達に対し紡織技術と農村経済が遅れていた中国の北方地域と、紡織技術が優位を占めていたが木綿栽培は全面に普及していないために、綿花不足でついに商品生産化まで至らなかった広東・福建を中心とする地域の境界線が、だいたい揚子江にあり、この地域は両方の長所を兼具していると指摘している。⁽⁴⁾

また、中国の学者は経済的な視点から江南地域における綿産業が発達していた理由を分析した。清代の江

南は、全国で最も人口密度の高い地域であり、食糧の生産だけではその膨大な人口を養うことができず、過剰労働力を消化し、そして農閑期を有効に使うために、綿紡織のような設備上も技術上も簡単に季節に大きく影響されない副業に従事してきたという。⁽⁵⁾

「姑蘇繁華図」に描かれている看板を詳しく見ていくと、特に衣料品を扱う店舗の看板に書かれている地名が目をはひく。なぜなら、ほかの商売をする店には、地名が書かれている看板はほとんど見られないのである。

地名が書かれている看板を描いているところは15箇所あり、絵の流れによって、文末に付けてある表のとおりである。

あげられた地名のなかで、沂水は山東省にある。そのほか、「漢府」というのは、国家のひとつの生産機構として運営されていた、南京にある江寧織造局の所在地で、ここでは江寧織造局を意味している。この二つを除き、すべては江南の地名である。地方文献を調べると、これらの地名は、画家が蘇州の近くにあるところから適当に挙げたのではないことがわかる。ここから、当時の江南地域の紡織業の一つの特徴とも言える特産化を見出すことができる。

1 よく見られる「松江」

計15箇所では、布関係の看板が多いことが明らかである。これらの看板が懸かっている店のほとんどに「布行」という看板も懸かっている。「布行」とは、布の取引仲介を専業とする牙行である。その中、3分の1の5箇所には書かれている地名の松江についてみてみよう。

現在、上海市に松江區があるが、清代の松江府はこれと等しいものではない。当時は、華亭、上海、青浦、婁、奉賢、金山、南彙の7県及び川沙庁を領していたのである。⁽⁶⁾ 松江は明代から江南地域の木綿生産の中心地になった。西嶋は、

中国農村棉工業の展開は、揚子江下流デルタ地帯の東端、すなわち現在の上海をふくむ明清時代の松江府の領域一帯及びその周辺の諸州県を舞台として行われた。⁽⁷⁾

と述べている。地方文献では、「わが松江は、綿布を以って、天下の衣被をなす。」、「松江出産の木綿の布

は、天下の衣被となる⁽⁸⁾と松江での綿布生産の量をいう。遠く離れている広東では、「冬に用いる布の多くは、呉や楚からのものである。松江の梭布や、咸寧の大布など、これを取引する商人がひっきりなしに往来する」と、明末清初の屈大均は、松江梭布の名をあげている。



図1 「松江大布」(表の6)

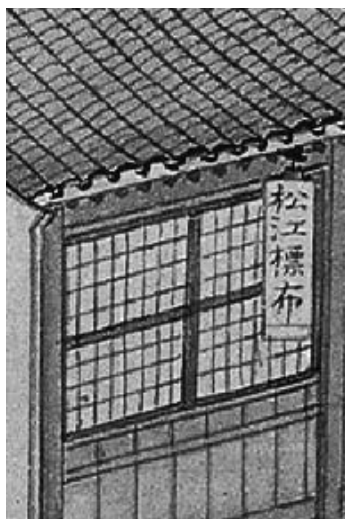


図2 「松江標布」
(表の8)



図3 「自置松江青藍大布」(表の13)

木綿栽培は、松江府の全体に普及していたのではなく、主にその東部に集中している。清・光緒9年〔1883〕刊『松江府志』巻五に、

郡の東部にある奉賢、上海、南彙三県では、地形がやや高く、稲より木綿と豆のほうが作られる。木綿はとくに盛んに栽培されている。…稲を作るものは、十分の三四に過ぎない。⁽⁹⁾

とある。

さらに、清・乾隆編纂、道光11年統纂『金沢小志』の巻一・風俗に、こう記述している。

松江出産の木綿の布は、天下の衣被となる。郷の東部では、木綿を植える者は十人に三人、俗はその土地を花地と呼ぶ。ただし、郷の西部の土地は(木綿に)合わない。女の仕事は、裁縫以外に布を織ることを恒業とする。金沢では、貧富問わず、婦女に紡織をしない者がいない。⁽¹⁰⁾

とある。この記述に、二つの重要な情報が含まれている。第一に、木綿栽培は松江府の東部で行い、西部の土地は木綿に合わないと明言している。それについて、西部の土地は木綿に合わないだけでなく、東部の土地も稲作に合わない。なぜなら、地勢が高くて、灌漑が難しいからである。

その二、西郷にある金沢では、木綿栽培を行っていないのに対し、女性は布の生産を恒業とし、紡織をしない人がいないということである。ここで、当時は、綿花の生産と綿布の生産がある程度分離されていたこと、すなわち材料としての綿花または綿糸が流通されているのがわかる。

さらに注目したいのは、紡織は女性の仕事だということである。このような例は、またいくつか挙げることができる。

郷村での紡織、特に精敏である。農暇のときに出す布は毎日万疋に数える。紡織を以って耕作を助け、女紅は力になるのである。⁽¹¹⁾

(嘉慶22年〔1817〕刊『松江府志』巻五)

女性の仕事をいえば、裁縫の得意な者は十人に一人、紡織の得意な者は十人に九人いる。⁽¹²⁾

(嘉慶20年〔1815〕『珠里小志』巻三)

布は、木綿で為される。幅の広いのは大布といい、狭いのは小布という。農婦の多くはこれを業とする。⁽¹³⁾

(清光緒17年〔1891〕・『重輯楓涇小志』卷一)

民(男性を意味する)は耕作に勤め、女は紡織に勤める。⁽¹⁴⁾

(清・嘉慶年間修、咸豊元年〔1851〕増修『寒圩小志』)

つまり、農村での紡織の仕事は、女性の務めとされていた。西嶋は、当時の紡織業は、零細で、農家の婦女子が従事する副業的経営である性質を持っていたのであり、問屋生産制のような商業資本の支配的な参入は史料から見出せないと指摘した。⁽¹⁵⁾ この点について、さまざまな議論が行われてきた。田中正俊によって明清時代の問屋制前貸生産が検出され、紡織を生計の主要部分とする農民の存在が明らかになった。⁽¹⁶⁾ これに対して、中国の学者張海英は、明清江南地域の綿紡織における商業資本の参入は確かであるが、農村での生産の多くは、家庭を生産単位として、さまざまな原因で、生産者の最低限の生活を維持することしかできないため、拡大再生産は不可能であり、労働力と商業資本との間に、安定的な関係を結ぶことができなく、多くの農民は紡織に従事しても、土地から離れられなかったと論じた。⁽¹⁷⁾ 当時の農村での綿紡織は、主に家庭内で行われ、女性をその主要な労働力としていたといえよう。

江南地域の紡織技術は、元代に松江府出身の黄道婆が崖山(今の海南省)で学んだ技術を松江まで持って帰り、さらに改革して広げたと伝えられている。地方誌によく引用されている陶九成の『輟耕録』で、松江の烏泥涇では土が瘠せていて、人々は生計を立てることが難しい。そのために、福建や広東から木綿の種を求めてきて布の生産を始めたが、技術と設備の所為でなかなか功を納めることができなく、黄道婆の伝授によって大きく進歩し発達してきた。そして、人々は黄道婆を記念するために、その死後、祠堂を建てたとい⁽¹⁸⁾う。西嶋は、南海から伝来された技術のほか、中国で以前から高度に発達していた絹織物の技術も、松江府での綿紡織技術の進歩の理由の一つであると述べてい⁽¹⁹⁾る。いずれにせよ、元の時代に、松江土産の綿布は、すでに上質であるとされていたらしい。嘉慶『松江府志』に、

元・至元の『嘉禾志』で「松江の物がよい」とい⁽²⁰⁾う。

とある。さらに、明・万暦の『鎮江府志』に、成化年

間、郡守が公文を出して、松江から紡織に精通している男女を招き、技術を伝えるよう要請し、地元の人にはその技術を学んだ人がおり、織った布もかなり精細だとの記述がある。松江の製品も生産技術も、認められていたのがわかる。

こうした松江府を中心に、江南地域の綿産業が発達してきた。松江以外、嘉定、太倉、崑山、常熟なども木綿栽培と綿布の紡織を取り込んでいた。その理由も地勢が高く、または土地が砂土であり稲作に不適であるためといわれる。さらに太倉は、稲作に合う土地でも綿花を植えるようになったとい⁽²¹⁾う。「姑蘇繁華図」に唯一の「棉花行」、すなわち綿花の取引を行う牙行では、太倉綿花を販売している。そこに書かれる「子浄棉花」とは、種をとられた「浄花」を言うのか、あるいは種をとられていない「子花」をも含めて、両方も取引の対象になっていることをいうのか、さらなる資料の蒐集の上で解明したいと思う。



図4 「太倉棉花」(表の4)



図5 棉花行(表の3)と「子浄棉花」

技術の発展に伴い、製品の品種も多くなった。「姑蘇繁華図」に描かれている看板に、商品の種類を書いているものもある。「松江大布」、「崇明大布」及び「松江青藍大布」、「松江標布」と「松江加長扣布」のような地名がついているものがあるし、「斜紋布行」、「青藍梭布」などの地名がついていないものもある。

これらの布の品種について、地方誌によると、
布に属するものに、標・扣・稀の三種類がある⁽²²⁾
(清・『七宝鎮小志』巻一)
木棉扣布、木棉稀布…

(嘉慶18年〔1813〕『淞南志』巻四)
布の細密で幅の狭いものは、小布といい、郡城では扣布という。疎らなものは稀布という。⁽²³⁾

(清・嘉慶22年〔1817〕『松江府志』巻六)
布は、木綿で為される。幅の広いのは大布といい、狭いのは小布という。⁽²⁴⁾

(清光緒17年〔1891〕・『重修楓涇小志』巻一)
斜紋布、縦糸を真っ直ぐにして横糸を交錯にし、水紋のように織り成す。⁽²⁵⁾

(清・嘉慶10年〔1805〕『婁塘鎮志』巻八)

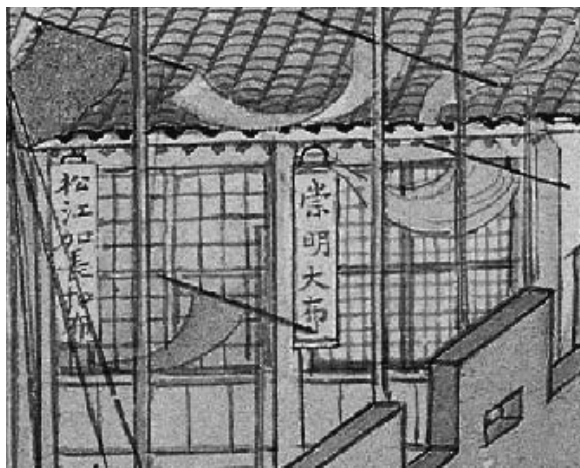


図6 「崇明大布」と「松江加長扣布」(表の10, 11)

さらに、綿布産業の発展は、その周辺産業をも発展させてきた。ここで現れた「青藍梭布」、「青藍大布」は、藍で染めた布である。地方誌には、
郷民の恃みになるのは、靛⁽²⁶⁾だけである。

(清・嘉慶10年〔1804〕『淞南志』巻二)
村民は靛青を植えることを好む。⁽²⁷⁾

(清・咸豊6年〔1857〕『紫隄村志』巻二)
乾隆五十三年、村の人は藍を作って、大きい利益⁽²⁸⁾を取めた。

(同『紫隄村志』巻二)

とあり、「靛」や「靛青」という藍が盛んに作られていたことがわかる。

2 「松江」の布に対する「蘇杭」の絹

前述のように、「姑蘇繁華図」によく見られる「松江」という地名は、明清時代の江南地域における綿産業の中心であった。これに関して、光緒『松江府志』に、郡内では、道光以前は養蚕を行っておらず、道光末に従事し始めたが、咸豊年間の兵燹、すなわち太平天国による南京および蘇南、浙江の占拠のために浙江西部と江寧(南京)から避難してきた人の講習を受けて、漸く増えてきたとの記述がある。⁽²⁹⁾「姑蘇繁華図」が書かれた乾隆年間に、松江土産の絹製品が描かれていなかったのはいままでのない。

この記述から読み取れるひとつの情報は、浙江西部と江寧(南京)では、養蚕が発達しており、桑の栽培を他の地域の人々に教えて伝統のない地域に広げるほどの技術を持っていたことである。

「姑蘇繁華図」では、木渚鎮に「蘇杭紬緞紗羅」と書いてある看板が見える。そして、「湖縐綿綢」、「濮院寧綢」、「漢府八絲」の看板がある。前文で述べたように、「漢府」は南京にある江寧織造局を意味し、その製品の「漢府八絲」は宮廷に献上する貢ぎ物である。これと蘇州を除き、杭州、湖州、濮院はすべて浙江の地名である。

浙江の地名は、蘇州のそれより多く挙げられているが、その地の絹物の生産が蘇州の生産に勝っていたのではない。実際は、蘇州の絹物の生産は非常に発達していた。地元であるがゆえに、あえて地名をあげられていないのではないと思われる。

清・乾隆年間、納蘭常安はその『宦遊筆記』で、

最近の人々は、蘇杭を並べて繁華都市というが、杭州の人は経営があまり得意ではなく、その地は東の隅にあることを知らない。…嘉善、湖州には生糸が出るが、縐緞紗綺などの絹物は蘇州にだいたい揃っており、値段もあまり高くない。もしそんな遠い所に仕入れに行けば、原価が上がるほか、品物もよく⁽³⁰⁾ない。

と述べている。



図7 「漢府八絲」(表の5)



図8 「本店自制蘇杭緞紗羅等」(表の1)



図9 「澣院寧絹」(表の14)

蘇州城の東部で、絹物の生産は非常に盛んであり、既に産業化されていたことも、地方誌で窺える。

郡城の東部では、みな機業を習う。…工匠たちはそれぞれ専門的能力を持ち、長期に特定の主宰者に雇われ、日給で給料をもらう。⁽³¹⁾

と康熙年間の『蘇州府志』巻二十一に記している。「姑蘇繁華図」の遠いところに「織造部堂」とある幡が見える。同作者の「姑蘇城図」によると、これは蘇州城の東南部にあった織造署の幡である。清代における政府によって、「江南三織造」といわれる宮廷用の織物を生産する織造府が設けられており、その一つはこの蘇州の「織造部堂」である。織造府は宮廷への貢ぎものを生産するために設けられたが、民間産業と深くかかわっており、多大な影響を与えていた。⁽³²⁾

蘇州の周辺地域でも、養蚕が非常に盛んであった。

太湖の近くの者は、どの家も蚕を飼って生糸を取る。⁽³³⁾

(乾隆『吳県志』巻二十二)

などの記述は、地方文献では非常に多く見られる。

「姑蘇繁華図」に登場する「震沢紬行」という絹物の取引をする牙行の存在は、震沢では養蚕がとくに盛んであったことを語っている。鎮志によれば、

縦糸を紡ぐことと絹物を織ることに従事する人もいる。自分の生糸を以って紡いで牙行に売るのは、郷経という。牙行から生糸を預けられ、給料を貰って代わりに紡ぐものは、料経という。絹物を織るには、有力者は人を雇い、貧困な者の多くは自らする。その紋様は流行に従って変わる。これに精通する者は、人よりいい給料をもらっている。⁽³⁴⁾

(清・道光『震沢鎮志』巻二)

とある。ある程度産業化されていたと言えよう。



図10 「震沢紬行」(表の12)

綿紡織と同じように、養蚕は主に女性の仕事であり、家で行う営みであった。一例を挙げると、

婦女は、養蚕、刺繍、織りを仕事とする。⁽³⁵⁾

(光緒『光福志』巻一)

の記述がある。「姑蘇繁華図」の最初の部分に描かれている山前村のある農家で、何人かの女性が庭で縦糸ののりをつけたり、室内で繰り糸を繰ったりする場面が見られる。周りの養蚕関係の道具を考えると、ここで描かれているのは生糸の生産である。このような場面は、「耕織図」によく現れており、すでに農村生活を描くときの決まったパターンである。その中、室内で繰り糸を繰っている場面の構図は、康熙35年につくられた「御製耕織図」と非常に一致していることが注目される。農夫たちが田んぼで働いている場面とあわせて、伝統的な中国人にとって社会の理想像である「男

耕女織」,即ち,男が食糧の生産に力を尽くし,女性は衣料品の生産に取り込む,自給自足の社会を表現していると言える。



図11 庭で縦糸にのりをつける



図12 室内で繰り糸を繰る



図13 康熙「耕織図」における繰り糸の場面。
『清殿版画叢刊』(学苑出版社, 1998)より

Ⅲ 製品の流通

1 取引

「姑蘇繁華図」によく見られる松江の地名が載っている看板は,松江は当時の江南における綿産業の中心であることを語っていることは,すでに述べた。ここで注目したいのは,これらの看板を懸けているのは,小売店ではなく,牙行であることである。蘇州は,全国における松江産綿布の取引の中心であったのである。光緒『松江府志』に

一つの紡織機の勤めを積み,一人の女性の力を尽くし,月々綿布三十丈が取れる。冀(今の河北)の北部からの巨商は,千億の資金を持ち,…蘇常(蘇州と常熟)に着き,…松江産の布でないとは入れし
(36)
る。

とある。河北の商人が松江産の布をしか仕入れないことと,仕入れは松江ではなく蘇州で行うことがわかる。

綿布の取引市場について,「棉布の取引市場は,布客(外来の棉布商人)・布莊(棉布問屋)・布行(棉布牙行)の三者から構成されていた。⁽³⁷⁾」とされる。「布行」というのは,「姑蘇繁華図」によく見られる。「布莊」について,民国『黄渡鎮志』によれば,「俗では,布を買収する店を莊という」とある。布客の呼び方については,方言において様々あったようである。たとえば,嘉慶『松江府志』で綿布の取引を行う人について
(布を)多く買い集めて他所のところに持って行き,売る機会を探す者は,水客といい;少量(の布)を手に入れ,他人に譲渡する者は,小袱頭という。
(38)
と語っている。

蘇州はこのような様々なレベルによって構成された綿布の取引市場の中心である。蘇州の布行は綿布の生産地に布莊を設立して直接綿布を購入するほか,松江府城の布行を通して綿布を大量に買収して全国からの綿布商人に提供する。⁽³⁹⁾

2 運輸

松江府の西部では木綿栽培を行っていないけれども,紡織は非常に盛んだったことから,綿布の生産と綿花の生産がある程度分離しており,材料としての綿

花または綿糸の流通が窺えることはすでに述べた。また、松江府で生産した布が、蘇州の牙行を通して全国に広がる状況は、有効な輸送手段がないとできないことである。このような材料や製品の流通に、発達していた水上交通は非常に重要な役割を果たしていたと考えられる。たとえば、明代に作られた『水陸路程』⁽⁴⁰⁾に

嘉興から松江へ行けば、貨物を持っていない場合には小船を雇う必要がない。東柵口で小船に乗り嘉善に行き、それから綿紗船に便乗して松江に行けばいい。大船の配慮は必要でない⁽⁴¹⁾。

とある。嘉善と松江の間に「棉紗船」という貨物船があった、しかも相当な頻繁さで往来していたことがわかる。松江は、綿工業の中心として、地産の木綿や綿糸だけを使って綿布を生産していたのではなく、かなり広い範囲で材料としての綿糸と綿花を流通させていたことが想定できるであろう。

中国の江南地域に行ったことのある人であればわかると思う。その地域には河川が多く、橋も非常に目立っている。これらの橋は、ほとんど「姑蘇繁華図」で描いた橋と同じように、アーチ形をなしている。きれいであるが、ほぼ正半円となっている橋を渡るのは、荷物を載せている車はもちろん、空車でも無理である。同じ「拱橋」というが、中国の華北地方の拱橋は、主に平坦な弧状であり、その上を、牛馬や車は自由に通行できる。中国で最も有名な石造拱橋の一つ、河北省にある安濟橋はその代表である。



写真1 安濟橋。梁思成『図像中国建築史』(百花文芸出版社、2001)より

江南地域の拱橋が、半円形に近い形で作られた主な理由は、その下を船が通るからだと思われる。「姑蘇繁華図」には、さまざまな船が描かれているほか、船が橋を潜る場面もよく見られる。

「姑蘇繁華図」では、衣料品や綿糸、綿花などを船に載せて運んでいる場面は検出しなかったが、水運が盛

んであるがゆえに、地方文献で、蘇州と松江の間の商業水路について、現代の旅行ガイドブックに相当する書き物が何十種類もあるといわれる。先に引用した『水陸路程』⁽⁴²⁾はその一つである。川勝守は、これを用いて、長江デルタにおける鎮市の発達と水利の関係を⁽⁴³⁾検証した。



図14 懷胥橋とそれを潜っている船。左側にある大型帆船は、帆柱を倒して橋を潜ろうとしているのが見える。

『水陸路程』の「七、蘇松兩府各処水」に、蘇州・松江間の水上交通路線が7本ある：

- (1) 蘇州府由嘉興至上海県⁽⁴⁴⁾
- (2) 松江府由官塘至蘇州府
- (3) 松江府由太倉至蘇州府
- (4) 松江府搭双塔船至蘇州府
- (5) 蘇州府由周莊至松江府
- (6) 松江府由嘉善縣三白蕩至蘇州府
- (7) 蘇州府由陶家橋至松江府

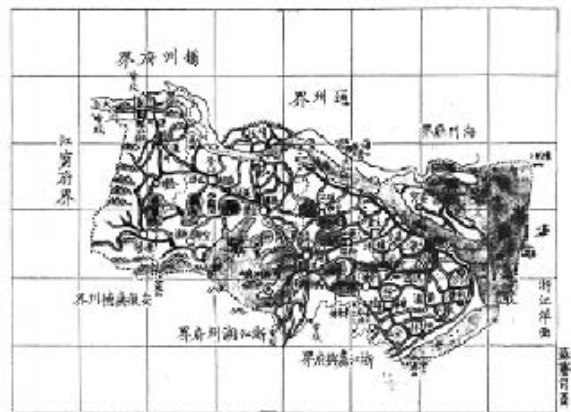


図15 清・光緒年間の蘇州府、松江府地図。『清代地図彙編 江蘇全省地図』(西安地図出版社、2005)より

図15の地図は清・光緒年間のもので、あまり詳しくないが、この7本の路線はかなり迂回しているのが、地図より大体わかる。その表題の下に「路雖多迂、布客不可少也」とある。これらの路線は、布の取引を行う商人には、かなり重要であることがわかる。

おわりに

以上、「姑蘇繁華図」、主にその中の衣料品を扱う店舗の看板を糸口として、地方文献に照らして、清代前期の江南地域における紡織業及びその流通についての検討を試みた。本稿は、基本的に、「姑蘇繁華図」による「東アジア生活絵引き中国編」の編纂作業から生じたものである。図像資料で東アジアの人々の営みを読み解くことを目的とするこの作業から、従来、美術史研究の対象とされていた絵巻物に、大量の情報が潜んでいることがわかった。

本稿では、清代初期の江南地域における紡織業の状況のみならず、製品や材料の流通についても論じようと試みた。偶然であろうか、「姑蘇繁華図」に描いてある衣料品関係の店は、ほとんど小売店ではなく、「行」または「荘」という、取引市場の一環になっているものである。それゆえ、流通の研究は非常に重要である。今後、更なる研究が必要である。

注

- (1) 其図自靈巖山起，由木澆鎮東行，過橫山，渡石湖，歷上方山，從太湖北岸介獅和兩山間入姑蘇郡城，自葑盤胥三門出閘門外，轉山塘橋至虎丘山止。
- (2) [清]董兆熊，「吳郡歲華紀麗序」，[清]袁景瀾，『吳郡歲華紀麗』，江蘇古籍出版社，1998：1。
- (3) 凡農田五畝至十畝者，栽桑麻木綿各半畝，十畝以上者倍之…不如令者，有罰。
- (4) 西嶋定生，『中国經濟史研究』，東京大学出版会，1966：732-733。
- (5) 史建云，「從棉紡織業看清前期江南小農經濟的變化」，『中国經濟史研究』，1987(3)：67-68。
- (6) 清・光緒9年刊〔1883〕『松江府志』による。
- (7) 西嶋定生，『中国經濟史研究』，東京大学出版会，1966：732。
- (8) 『梧潯雜佩』，嘉慶22年〔1817〕刊『松江府志』卷五に引用されている。
- (9) 東郡奉(賢)上(海)南(彙)三隄，地形較高，種棉豆多于秈稻，而棉尤盛。…其種稻者不過十之三四。
- (10) 松江棉花布，衣被天下。東鄉種木棉者，居十之三，俗呼曰花地。惟西鄉土不宜。而女紅自針帶外，以布為恒業。金沢無論貧富，婦女無不紡織。
- (11) 至鄉村紡織，尤尚精敏，農暇之時，所出布匹日以萬計。以織助耕，女紅有力焉。
- (12) 女紅，工針帶者十之一，工紡織者十之九。
- (13) 布，以木棉為之。闊者曰大布，狹者曰小布。農婦多以為業。
- (14) 其民勤于耕…其女勤紡織。
- (15) 西嶋定生，『中国經濟史研究』，東京大学出版会，1966：743。
- (16) 田中正俊，「明・清時代の問屋制前貸生産について—衣料生産を主とする研究史的覚え書—」，西嶋定生博士還暦記念論叢編集委員会編，『東アジア史における国家と農民』，山川出版社，1984：395-440。
- (17) 張海英，「明清江南地区棉布市場分析」，『華東師範大學學報：社哲版』1991(1)：58-63，51，同「明清江南地区勞動力市場探研」，『歷史教學問題』1991(1)：16-18。
- (18) 乾隆16年『金山縣志』，嘉慶22年『松江府志』などによる。
- (19) 西嶋定生，『中国經濟史研究』，東京大学出版会，1966：810。
- (20) 至元『嘉禾志』：「松江者佳。」
- (21) 明・崇禎『太倉州志』卷十五に，「州地宜種者亦十之六七，皆棄種蓂花。」とある。
- (22) 布之屬，有標・扣・稀三種。
- (23) 布密而狹者為小布，郡城謂之扣布。疏而闊者為稀布。
- (24) 布，以木棉為之。闊曰大布，狹曰小布。
- (25) 斜紋布，經直緯錯，織成水紋。
- (26) 鄉民所持，惟靛與棉布。
- (27) 村民好種靛青。
- (28) 乾隆五十三年，村民種青秧，大獲其利。「青秧」とは，藍のことである。清『黃渡鎮志』に，「藍，俗稱是青秧と呼ぶ」とある。
- (29) 「郡境向不治蚕桑，自道光季年南浦鄉人始有樹桑飼蚕者。及咸豐兵燹，浙西及江寧人避難之浦東，益相講習，官吏復鼓舞導之，近雖植桑漸多，然利猶未薄。」とある。太平天国の後期に至り，忠王李秀成の一連の大きい軍事勝利によって，江南地域の主な生糸産地がほとんど太平天国の治下に納められた。この記述では，松江でそれをきっかけで，養蚕が多く従事されてきたというのが，当時，上海で貿易などを行っていた外国人による資料に，生糸を求めるために太平天国と交渉することがよく記されており（たとえば，リンドレー『太平天国—李秀成の幕下において—』〔増井経夫，今村与志雄訳，平凡社，1964〕，Joseph Edkin「訪問蘇州の太平軍」〔王崇武訳，『太平天国資料訳叢』所収，神州国光社，1954〕などがある），その規模の差がよく窺える。
- (30) 近人以蘇杭並稱繁華之都，而不知杭人不善營運，又僻在東隅。…即嘉湖產絲，而綢緞紗綺，于蘇大備，價頗不昂。若赴所出之地購之，價反增重，貨且不美。
- (31) 郡城之東，皆習機業。…工匠各有專能，匠有常主，計日受值。
- (32) 織造局や織造衙門ともいい，ほかの二つは南京，杭州にある。羅正義「淺述『江南三織造』」(『江蘇絲綢』，1991(増刊)：72-74)，範金民「清代前期江南織造的幾個問題」(『中国經濟史研究』，1989(1)：78-90)など参照。
- (33) 近太湖者，家戶畜(蚕)取絲。
- (34) 亦有兼事紡經及織綢者。紡經以己絲為之，售于牙行，謂之鄉經。取絲于行，代紡而受其值，謂之料經。織綢則有力者雇人，貧者多自為之，其花樣逐時不同。有專精此者，其受值較

- 多于他工。
- (35) 婦女以蚕桑，繡織為工。
- (36) 積一機之勤，疲一女之力，月可取布三十丈焉。冀北巨商，挾資千億，…達于蘇常，…非松不辦。…吾聞之蘇賈久矣。
- (37) 西嶋定生，『中国経済史研究』，東京大学出版会，1966：740。
- (38) 或有多自搜羅至他処覓售者，謂之水客；或有零星賺得而転售他人者，謂之小袱頭。
- (39) 陳忠平，「明清時期江南地区市場考察」，『中国経済史研究』1990（2）：24-40。
- (40) 尊経閣文庫所蔵，本稿では，西嶋，川勝の著書に引用されているものを使う。
- (41) 嘉興至松江，無貨勿雇小船。東欄口搭小船至嘉善県，又搭綿紗船至松江，無慮大船。
- (42) 陳学文，「明清時期江南の商品流通与水運事業的發展——從日用類書中商業書有關記載來研究明清的江南經濟」，『浙江学刊』1995（1）：31-37。
- (43) 川勝守，『明清江南市鎮社会史研究－空間と社会形成の歴史学－』，汲古出版社，1999：177-189。
- (44) 乾隆年間に，上海は松江府の領内にあることを考え，この路線を蘇州・松江間の路線とする。
- 1988『明清江蘇農村經濟資料』南京：江蘇古籍出版社。
- 川勝守
1999『明清江南市鎮社会史研究－空間と社会形成の歴史学－』東京：汲古出版社。
- リンドレー
1964『太平天国－李秀成の幕下において－』増井経夫，今村与志雄訳，東京：平凡社。
- 西嶋定生
1966『中国経済史研究』東京：東京大学出版会。
- 納蘭常安
1971『宦遊筆記』台北：広文書局。
- 秦立纂
1992『淞南志（中国地方志集成・郷土志專輯・四）』上海：上海書店。
- 史建云
1987「從棉紡織業看清前期江南小農經濟的變化」『中国経済史研究』7（3）：67-68。
- 宋如林等修・孫星衍等纂
1970『松江府志（中国方志叢書・華中地方・第10号）』台北：成文出版社。
- 田中正俊
1984「明・清時代の間屋制前貸生産について－衣料生産を主とする研究的覚え書－」『東アジア史における国家と農民』東京：山川出版社。
- 汪永安原纂
1992『紫堤村志（中国地方志集成・郷土志專輯・一）』上海：上海書店。
- 徐崧・張大純編輯
1999『百城煙水（江蘇地方文獻叢書）』南京：江蘇古籍出版社。
- 徐揚
1988『姑蘇繁華図』香港：商務印書館。
1999『姑蘇繁華図』北京：文物出版社。
- 楊学淵等編纂・馮桂芬等纂
1970『蘇州府志（中国方志叢書・華中地方・第5号）』台北：成文出版社。
- 張海英
1991「明清江南地区棉布市場分析」，『華東師範大學學報：社會哲版』（1）：58-63，51。
1991「明清江南地区労働力市場探研」，『歴史教学問題』（1）：16-18。
- 章樹福纂
1992『黃渡鎮志（中国地方志集成・郷土志專輯・三）』上海：上海書店。
- 周鳳池纂
1992『金沢小志（中国地方志集成・郷土志專輯・二）』上海：上海書店。
- 周鬱賓纂
1992『珠里小志（中国地方志集成・郷土志專輯・一）』上海：上海書店。
- 洪煥椿編

[2005年12月9日受理，12月26日審査終了]

表 地名がのっている衣料品屋の看板

番号	看板の内容	地名	絵での場所
1	本店自製蘇杭紬緞紗羅等	蘇州, 杭州	木洩鎮斜橋の辺り
2	^{しょうこう} 松江大布	松江	胥門前の ^{かいしやうきやう} 懷胥橋の辺り
3	^{たいそう} 太倉棉◆(花)	太倉	胥門前の懷胥橋の辺り
4	太倉棉花	太倉	万年橋の上
5	漢府八絲	漢府	万年橋の辺り
6	松江大布	松江	万年橋から約20センチのところ
7	湖縐綿綢	^{こしゅう} 湖州	同上
8	松江標布	松江	藩台衙門の下
9	^{きすい} 山東沂水繭絲發客	沂水	閩門内商店街
10	^{すうめい} 崇明大布	崇明	閩門内商店街の下
11	松江加長扣布	松江	同上
12	^{しんたく} 震沢紬行	震沢	同上
13	自置松江青藍大布	松江	閩門内商店街
14	^{ほくいん} 濮院寧◆(綢)	濮院	北碼頭のあたり
15	山東繭紬	山東	北碼頭のあたり

(場所について、1999年に文物出版社により出版された『姑蘇繁華図』の説明に従う。構図の理由で書かれていない字は、◆で表示し、推測した字を括弧に入れる。)